

微笑<sup>ほほえ</sup>む似<sup>え</sup>非<sup>せ</sup>紳士<sup>しんし</sup>と純情<sup>じゆんじよう</sup>娘<sup>むすめ</sup>  
3

目次

微笑む似非紳士と純情娘 3

白夜様の休日 167

旅先での出会い 243

微笑<sup>ほほえ</sup>む似<sup>え</sup>非<sup>せ</sup>紳士<sup>しんし</sup>と純情<sup>じゆんじよう</sup>娘<sup>むすめ</sup>  
3

## 第一章 董色片想い

### 〈予期せぬ展開〉

轟いた銃声、そしてパラパラと落ちて私の足元に散らばるシャンデリアの破片。

ドクン、ドクンと心臓が早鐘を打っている。

私、一ノ瀬麗は従兄の聖君が開発した青い薔薇のお披露目パーティーで、テロ事件なんて非日常に巻き込まれてしまった。

テロの目的は、青い薔薇——と思いきや、実はその薔薇から作ることができるといふ危険な薬と、さらには不可思議な能力をもつ私たち「古紫」、一族の血にまつわるデータだった。そのことを知って、テロリスト集団となんとか対峙していた私だったが……ただいま危機的状况は、絶賛継続中である。

今、私は身じろぎひとつできずにいる。何せ、拳銃を突きつけられているのだ。

そんな私を見ながら、テロリストのボスが非情な宣告を下した。その女を捕らえろ、と。

指でぱちんと合図をした直後、黒尽くめの男たちが一斉に武器を構え直す。

ちよ、ちよと待って！ これってかなりやばくない!?

じりつと、一歩後退した。

後ろを見せたら撃たれる。そう本能的に察して、逃げ出すこともできない。

捕まえると命令を受けた数名の手下が、銃を構えて私にゆっくりと向かってくる。か弱い女の子に対してそんなに大勢の男が動くか、普通？ この卑怯者ども!!

「逃げなさい麗！」

聖君の必死な声が聞こえた。

自分だつて両隣で敵に武器を突きつけられて動けないのに、私を案じて逃げろと言っている。

近付いてくる彼等と聖君の顔を交互に見つめながら、私は必死に考えた。

ここでの最善の策は、一体何だ！

男のひとりが私に銃を向ける。脅しのつもりだろうけど、今はその確信がもてない。そして情けないことに、足が地面に埋まったかのように硬直して動けないのだ。

全身汗でびしょり。先ほどみたいに、テロリストに対して一説ぶつような強がりを見せる余裕なんて、一切ない。

だけど、そんな状況でも、隣に座っているK君のことが気になった。K君は今をときめくビジュアル系バンド、ADICのボーカルだ。人質が解放されるという絶好のチャンスに何故か出て行かず、私に付き合つてこの場に残ったのだ。完全に巻き込まれた、というところだろう。

でも、今テロリストにとつてのターゲットは、私のはず。テロリストの狙いが古紫こむらさきにあるとわかっていいるのだから、K君のことは見逃してくれるんじゃない？

「K……K君、逃げて」

K君は、傍観者ぼうくわんしゃのように、ただ座って状況を眺めている。そして、私の言葉に対して、肝が据わっているのか諦めているのかわからない口ぶりだ。「そんなことできるわけないでしょ」とあっさり言った。

「女の子ひとりで頑張らせて、挙句あげくに守られる俺って、どんだけ情けない男なの。麗が捕まるなら俺も一緒に捕まるよ。格闘技とかはできないけど、庇かばうくらいはできるはず。それにひとりで逃げだしたりしたら、ファンの子から幻滅されるしね」

マイペースな口調でそう言って、私を紫色の瞳で見上げてきた。パニックにならず、客観的に物事を見ていて、とても冷静だ。

そのクールな眼差しに、私の焦りも次第に落ち着いてきた。

「ご、ごめんね、K君……。でも何か今の台詞せりふ、かつこよかった。ちよつときめいたよ！」

こんな場面であんなこと言えるなんて！

どこか達観たつかんしていて、落ち着いてる彼を見ていると、次第に恐怖が薄まってきた。

K君って、私より年下じゃなかったっけ？ 以前なんとなく見た音楽雑誌にのっていた情報を、うつすらと思ひ出す。

うーん、この落ち着きっぷり。実は年齢詐称せしやうしているんじゃない……

「失礼だね、してないよ年齢詐称なんて」

「っ!? 今、私の心読んだ!？」

「麗は考えてることが顔に出るからわかりやすい。俺はプロフィール通り、二十三歳だよ」

二歳年下だったのか。

「これが終わったら、何かいい詩が作れそうな気がする」

ぼそりとK君が呟つぶやいた。

Addictの曲は、歌詞のほとんどを彼が担当しているという。そのせいか、こんな状況下でそんなことまで考えられるなんて。余裕のある君は大物だよ。

「うん、その時はCD送って。だから、お互い無傷でここから出よう」

視線は決してテロリストから逸らさず、私はK君と雑談混じりの会話をした。そのおかげで、かなり冷静さが取り戻せた。

焦つたらだめ。パニックになんてなつたら、その時点で死ぬ確率が跳ね上がる。

今は、おとなしく彼等の言うことに従う方が……

ジャキンとマシンガンのような銃をスライドさせる音が響いた。仲間のひとりには手にロープを持って持っている。

つてどっから出てきたのそれ！ さっきまでなかったよね!？」

間合いがどんどん詰められて、一番近くに来た敵との距離は、およそ三メートル。この距離で撃たれたら、確実に命中アットだ。ロープを持って近づいてくる彼等を睨みつけながら、唾を呑み込む。

やばい、もう駄目かも……!!

その瞬間。示し合わせたように動くものが見え、私は目を睜みはった。

目の前で展開された、予想外の光景——

「麗、あれ」

K君が指で示した方にゆっくりと顔を向ける。私は驚愕きょうがくのあまり、思わず口を開けた。

「お前ら。一体どういうつもりだ」

低く地を這はうようなテロリストのボスの声が届く。

彼がそう言うのも無理はない。

私たちに向かつていたはずの黒尽くめの男たちが、何故か一斉にボスに銃を向けていたのだ。椅子に座るボスの周りをぐるりと囲み、拳銃やマシンガンを彼の頭に突きつけている。そして、ロープを持っていた男がボスを縛しばり上げようとしていた。

テロリストは、ボスを合わせて十三名いたはず。そのうちの二人は、私の弟の響ひびと、バイトと違って巻き込まれてしまったという、ちょっとおマヌケな森田もりたさんだ。今、ボスを囲む輪に加わっていないのが四人いる。それ以外の全員が、ボスに反旗を翻ひるがえしたのだ。

呆然ぼうぜんとしてその光景を眺めている私とK君、そして聖君をよそに、仲間のひとりが目出し帽を脱いだ。

「……簡単な。お前が仲間だと思っていた男たちが、入れ替わっただけのことだ」

現れた顔を見て、思わず「あ！」と声が出た。

「あれ？ あの人って柔道のオリンピック選手じゃなかったっけ？ あ、もうとっくに引退したか」

K君の言葉につられてうなずく。

その遅い身体には、衰おとろえなんてどこにも見当たらない。引退して何年か経つけど、未だに鍛きたえ続けているであろうその人は、まさしく数年前のオリンピックメダリスト。

そして次々と目出し帽を取って正体をさらし始めた男たちを見て、私は信じられない思いで立ちすくんだ。

だってそこにいたのは全員、このパーティーに招待されていた人物で——

「ど、どーゆーこと……?」

脱力しそうになるのを堪たえて、ぼつりと呟つぶやいた。

「さあ、見たまんまじゃない?」

どこか意地悪そうに笑ったK君の顔を見て、瞬時に悟る。

「もしかして、このこと知ってたの? だからそんなに余裕だったの!？」

「うん。味方に入れ替わってるってことはね」

悪びれた様子もなく、彼はあっさりとうなずいた。

そして、そのあとの言葉に、今度こそ脱力した。

「だってこんな面白そうな場面、自分の目でちゃんと見たいじゃん」

映画みたいなシーンを生で眺められるなんて滅多にない、とでも言いたげな表情に、思わず深いため息が零れた。

案外いい性格をしているよ、この人！ さっきまでのかっこいい台詞も嘘か！

K君に対する見方が少し変わってしまった。

「別に嘘ではないけどね」

「だから、人の心を勝手に読まないで!!」

輪に加わっていないなかった四人のうちの二人も、帽子を脱いだ。ひとり響で、もうひとりがおそらく森田さんだろう。

残された二人は戦意を喪失したのか、呆然としたように動かずに、立ち尽くしている。

「響！ ちょっとどうなってるの!？」

近付いてきた弟に尋ねると、響は少し緊張が解けた顔で微笑んだ。

「うん。麗ちゃんがやったことをね、森田さんに協力してもらってやってみたんだ。さっきみんながトイレに行った時に、見張りをしていたテロリストたちと入れ替わったんだよ」

どうやら男性トイレには、ご丁寧二人の見張りをつけていたらしい。森田さんがテロリストたちに、男性は体力があるから見張りの数を増やして欲しいと言ってみたら、ひとりが一緒に来てくれたそうだ。

そして隙を見て森田さんが相手を気絶させ、トイレに来ていた人に協力を仰いだ。

招待客の誰かがトイレに行くたびに、テロリストに見張りの交代を依頼したという。

次々と、味方には加わらない敵を昏倒させ、身ぐるみを剥いで、彼等のフリをせずとこの会場に潜伏。何とも大胆で、そして危険と隣り合わせの作戦である。

ちなみに捕まえたテロリストたちは、未だにトイレにいるらしい。おそらくロープか何かで身動きがとれなくなっているのだろう。

響から一部始終を聞いて、一瞬言葉を失った。まさかそんなことをしていたなんて……!

「助かったからよかったけど、なんて危ない真似を……!」

「え、それを麗ちゃんが言っちゃう?」

うっ、それを言われると痛い……

気づくとボスは武器を奪われた上、ロープで縛り上げられていた。

それを見て、少し気を抜いたその瞬間、テロリストのひとりが、いきなり出口に突進してきた。

そう、戦意喪失をした二人のうちのひとり。そして彼が向かってきたのは、私の後ろにあるドア!

「どけー!!」

体格のいい男が拳を振り回して叫びながら、私の方へ激走してくる。

咄嗟に響の背中を突き飛ばして、遠ざける。

だがその一瞬で、間合いを詰められてしまった。

覚悟を決めて迎え撃とうと、身体にぐっと力を込めたその時――

「えい」

小さな掛け声とともに、K君が絶妙のタイミングで足を出した。目の前しか見ていなかった男は、その目論見にまんまと引っかかった。K君の足につまずき、スローモーションのように目の前で男が倒れていく。

思わず、倒れゆく男にタイミングを合わせて、私はその肩に右足を振り下ろした。ガン！

男は、そのまま床に倒れこんだ。

見事に、止めを刺すことができたらしい。

私はさらに、その男の左肩を踏みつける。

「うわ、麗……。ヒールで踵落しとか、容赦ないね」

「っ！ ち、ちがつ……！ 今のは咄嗟に足が出ちゃって!!」

踵落しをするつもりはなかったんだよ！ K君の言葉に、私は慌てて反論した。

それに、頭を狙わなかっただけありがたく思っただけだ。

唸って暴れている男の身体を、咄嗟にピンヒールでさらにぐつと踏む。足下から変な呻き声が聞こえたが、そのまま大人しくなった。

「スリットが入って、足が上げやすいのはわかるよ。でも、ドレスのまま足を上げるなんてはしたくない真似、レディが男の前でしちゃダメだよ。ビリッて音したけど、大丈夫？」

「え？ 嘘！ あ、ああ……！！ 破れた……！」

膝上五センチ程度だったスリットが、今では太ももの真ん中あたりまでになっている。

埃まみれになったり、裾を焦がしたり、スリットが破れたり……散々な目に遭っているこのドレス。いくらクリーニングに出しても、もう着られないなあ。

諦めのため息をついたところで、K君が再び話しかけてきた。その声はさっきまでの冷静なものではなくて、どこことなく悪戯を思いついた子供のように弾んでいる。

その予想通り――

「ね、麗。そのままさ、女王様っぽい台詞、言ってみて」

「は？ 何それ、嫌だよ！ 何で私が！」

「いいじゃん。今びつたりだし。男を踏みつけにしてるんだから、似合うと思うよ」

これは、したくてやっているわけじゃない！

この足をどかしたら、この人また暴れるかもしれないじゃん!!

でも完全に面白がっているK君は、私の拒否などきれいに無視だ。

「『頭が高い。地面に這い蹲んな、この豚男』とかどう？」

な、なんて台詞を……!!

でもどこかワクワクしているK君の顔を見ると、ある意味彼にはお世話になったし、これくらいいいしたことじゃないかな、って思えてくるから不思議だ。

それにもしかしたら、彼はアーティストとして、何かのインスピレーションを得ようとしているのかも？

数秒唸り続けて考えた後――



「一度だけだよ？」と念を押した。

こっくりとうなずきつつ目を細めて笑うK君を見つめて、私はため息をついた。

何度か深く息を吸ってはいて、呼吸を整える。

そうして、おもむろに右手を腰に当て、男を見下ろしながら、侮蔑おべつが混じった口調で声高に言い放つ。

「頭が高い。地面はに這い蹲つくんなさい、この豚男！」

ふう、コレで満足か！

じわじわとわきあがる羞恥しゆうちに、顔が赤面し始める。火照る顔でK君を見たら、彼は一言「あ」とだけ呟つぶやき、私の後ろに視線を向けた。

つられるように、私も振り返ると……

いつの間にか開け放たれている、両開きの扉。

扉の横には、まだ若そうな刑事っぽい印象の男性が、控えめに立っている。何か悪いものでも見たかのような、気まずい表情を浮かべて。バッチリ合った視線は、速攻で逸らされた。

しかし！ そんな見知らぬ刑事さんなんて、今はどうでもいい。

扉を開けたであろうその人は、まっすぐに私を見つめている。啞然あぜんとした顔で、私と、私が足蹴あしげにしている人物を凝視している。

自分の顔から血の気が引いていくのがわかった。

先ほどまでの顔の火照りはどこへやら。一気に顔面蒼白。

「と、ととと、東条さん……………」

「え、どれが？」と、平然と尋ねてくるK君は完全に無視。気絶したい衝動が身体中を駆け巡った。

K君の口車に乗せられて、平常時には絶対できない行為を、現在進行形でやっている自分。

穴に埋まりたいほど恥はずかしい。

あんなに会いたいと願っていた人物に思いがけず会えたことは嬉しい。が、それも時と場合によるもので。この状況では全く喜べない。

一体どうして、このタイミングで現れるんですか、東条さん!!



聞こえてきた銃声に、血の気が引いた。

ドクン、と心臓が嫌な音をたてて跳ねる。

次々に浮かぶ悪夢のような光景を、脳内から必死で打ち消す。

違う。彼女じゃない。銃声がしたからといって、誰かが撃たれたとは限らない。威嚇いかくのための発

砲かもしれない。

だが、冷静さを保とうとすればするほど、嫌な想像が絶え間なくわき上がり、自分を追い詰めていく。早鐘はやかねを打つ心臓が痛い。手足の血の気が引いていく感覚に、呑み込まれそうになる。

うっすらとかいていた汗が、急激に冷えていった。

白夜は冷たくなった手の甲で額の汗をぐいつとぬぐい、硬直していた身体を意志の力で再び動かした。

早く、早くこの目で確かめなければ。彼女の安否を、この目で！

再び駆け出そうと一步踏み出した瞬間、誰かが後ろから白夜の手首をがっしりと掴んだ。

「待ってください！ このまま乗り込む気ですか!? 死にますよ！」

肩で息をしながら自分の手首を握るのは、自分より若そうな刑事だ。白夜の手首を掴んだまま、彼は小さく「やっ」と追いついた……」と呟いた。

扉から、次々と刑事が姿を現す。先ほどの銃声が聞こえていたのだろう。彼等は皆、拳銃を構えている。

少し年かさの刑事が、一步進み出て白夜と向き合った。

「東条さん、あなたのは古紫から聞きました。事情はお察しします。ですが、ここから先は危険です。我々が動くまで、あなたは大人しく待っていてください」

「嫌です」

間髪をいれずに即答した。

白夜のこの返答に、周囲の反応が遅れる。

この状態で堂々と警察官に反発するとは――。彼らの間に動揺が走ったのがわかった。

「いや、それは困るのですが」

「もう散々待たされたというのに、まだ待てと仰るのですか。そもそもあなたたちが早く来てい

れば、私の麗さんが無茶をすることもなかったのですよ？ 愛する女性が捕らわれているのに、ただじっと黙って待っているって？」

刑事にまっすぐに視線を向け、白夜は静かな声音で言う。落ち着きを保ちつつも糾弾するその様子に、刑事は思わず声を詰まらせた。

白夜とて、彼等が相当やきもきしながら出勤命令が出るのを待っていたことはわかっている。警察の組織が複雑で、それでも早期解決に向けて頑張ってくれていたことは、麗の従兄であり、警視庁の管理官である隼人からも聞いていた。

しかし、抑えきれない衝動と不安を抱えたまま、じっとこの場で待つなんて耐えられない。

せめて状況を確認したい。邪魔をする気などない。だから、自分も同行させてほしい。

その想いが伝わったのだろうか――

白夜を引き留めたその年かさの刑事が、諦めの混じった表情を浮かべつつ、微かにうなずいた。

おそらく、隼人から何か言われていたのだろう。渋々ながらの了承だった。

白夜は一言「感謝します」と伝え、会場へ向かう彼等の後を追った。

しんと静まり返っていた最上階に緊張が走る。会場付近まで慎重に近づくと、唐突に室内が騒がしくなったことに気づいた。

突如、男の獣じみた雄叫びが、扉の外にまで響いてきた。思わず白夜は衝動のまま動いた。刑事たちの抑止の声は一步遅く、両開きの扉が白夜の手により開かれる。

「麗さんっ!!」

視界に飛び込んだできたのは、真紅のドレスを纏った若い女性の後ろ姿。そしておそらく叫びをあげたであろう男が、つまづく姿。

その肩をめぐけて、女性が踵落としを食らわせた。スリットから覗く足は、一度高く上げられてから一気に振り下ろされ、止めのように男の動きを封じた。白夜の後に続いた刑事たちの目が釘付けになる。

髪は乱れ、纏うドレスは遠目から見てもポロポロだ。だが、一体何があったのかと推測するよりも、目の前の光景が衝撃的すぎて……。一同はしばし嘔然としていた。

その後ろ姿だけで白夜は彼女の正体がわかったが、どうやら彼女はまだ、こちらに気づいていないらしい。

白夜は荒い呼吸を整えながら、じつと麗の後ろ姿に視線を注いだ。

——無事だ。彼女は、生きています。

震えながら怯えて泣くような、か弱さや儂さとはかけ離れた女性。

芯が強くて勇ましく、毅然とした後ろ姿からは、微塵も弱さを感じさせない。

だが、だからといって彼女が平気だとは、白夜は思っていない。

駆け寄りたい。怪我がないか、今すぐ確かめたい。

自分の胸の中に彼女を閉じ込めて、生きている温もりを感じさせてほしい。そして——気丈に振る舞い、ぴんと張りつめている糸を緩めさせて、思いっきり労わってやりたい。

もう、我慢はしない。たとえ彼女に嫌がられようと、感情の赴くままに抱きしめる。

そう思った時、麗らしくない発言が聞こえてきた。だが、それすら愛おしく感じる。内容についてどうこう思うよりも、元氣そうな声が嬉しかった。この際、言っていた台詞はどうでもいい。むしろ踏みつけられている男が気に食わない。

踏みつけられたい願望があるわけじゃない。が、動きを封じているだけだとしても、間接的に麗と接触している男に対して殺意が芽生える。

今すぐ離れろ、と。

ここで、麗の近くにいた青年が、白夜に気づいた。その青年につられるように、麗が振り返る。すると、少し赤面していた彼女の顔から、みるみる血の気が引いていった。その様子を訝しく思いつつも、ようやく顔を真正面からしっかりと見ることができて安堵する。

驚愕の色を浮かべる麗を早くその男から遠ざけたくて、彼女が生きている証を直に感じた。白夜は麗を見つめながら、彼女に近づいた。

〈募る恋心〉

ぞろぞろと、テレビのドラマで見かけるような厳めしい刑事さんたちが扉から入ってきて、一気に会場内は騒がしくなった。

先ほど解放された人質たちから、ある程度事情を聞かされていたのだろう。彼らがこの状況に困惑しているようには見えなかった。——まあ、多少は驚いていたようだったけど。何せ、助けに来たはずなのに、既に敵の親玉がロープでぐるぐる巻きにされているなんて、さすがに予想していなかったらしい。

が、今の私には、冷静に刑事さんたちの様子を眺める余裕も、彼等の心理状態を分析する余裕もなかった。

東条さんから、視線が外せない。

私が動揺していることは、きつとバレバレだろう。

血の気が引いて青ざめたまま、私はごくりと唾を呑み込んだ。

一体何故、こんなタイミングで……！

ちらりと視線を落として自分のドレスを確認する。何度見ても、やっぱりボロボロだ。

メイクだってほとんど落ちているだろうし、髪もアップにしていたのが解けているから、ボサボサ。先ほどトイレでざつと整えたけど、そんなのは焼け石に水だ。

こんな姿で、しかも豚男なんて言つて男を踏みつけにしている状態で。一体何をどう取り繕えばいいのだろう。絶対に何か変な誤解をされているはず。

この状況で、一体どんな顔して東条さんと会えと!?

冷や汗を流しながら思わず周りを見回す。誰もが忙しそうで、私たちのことなんか気にも留めていない。

その中でK君、そして響と目があった。響は若干気の毒そうに視線を泳がせているから、まあ、よしとして。面白そうな顔で傍観しているK君。後で覚えていなさいよね〜!!

前から感じる強い視線に、私はゆつくりと顔を戻す。

いつもの穏やかで優しい表情からは想像ができないほど、東条さんは不機嫌でするどい空気を纏っている。柔和な微笑なんて浮かべていないし、珍しく眉だつて顰めている。張りつめた空気の中、彼はこちらに向かつてまっすぐに歩いてきた。

一步、一步、私だけを見て近づいて来る姿に、胸が焦がれると同時に、焦りが募っていく。

東条さんが相当怒っていることは、一目瞭然だ。危ないことはするなと言われたのに無茶をしたから、呆れているのかもしれない。

不安がわき上がってくる。

嫌われたらどうしよう、呆れられたらどうしよう。約束を守らず、突っ走ったことを軽蔑されちゃったらどうしよう——

次から次へと、負の思考が頭の中を駆け巡る。ギュッと爪が食い込むくらい、強く手を握りしめた。

目の前まで来た東条さんは、二歩ほど離れた場所で立ち止まり、私を見下ろした。直後、私の肘をぐいっと引つ張つて、足蹴にしたままだった男から私を引きはがした。

気づいた時には、嗅ぎなれた匂いと、よく知る温もりに包まれていた。今、東条さんに抱きしめられているんだ——

小さく零れた吐息が耳に届く。

「心配、しました……」

掠れた声で、耳元で囁かれる。ギュッと心臓が握られたように苦しくなった。

息苦しくなるほど強く抱きしめてくる東条さん。その背中に腕を回す。じわり、と胸に温かい何かが染み渡っていった。

もうこれで何度目になるだろう。この胸に抱かれて安心するのは。

自分の気持ちに気づく前から、幾度も東条さんの温もりに安堵を覚えていた。単に癒し効果が高いだけじゃない。嫌悪感を抱くどころか、むしろ好意的に思っていた時点で、私はきつと東条さんに惹かれていたのだろう。

彼の匂いで心が落ち着いて、ようやく会えた実感がわいてくる。

ぎゅっとしがみつくと腕に力を込めて、ぐしやぐしやな顔が東条さんのスーツにくつつくことも構わず、私は彼に思いつきり抱き着いた。

「心配かけて、ごめんなさい」

かほそい声で謝ると、抱きしめられている腕の力が強まった。まるで私が生きているのを確かめているかのように。

しばらく抱きしめられたままになっていると、東条さんがようやく腕を緩めた。私も彼の背中に回していた腕を下ろす。

身体を離すと同時に、東条さんの片手が、私の頬に添えられた。そして、そつと上を向かされる。

東条さんの手の温もりが直に伝わってきてどぎまぎする。間近に彼の麗しい顔がドアップで映って、呼吸を忘れてしまいそうだ。

髪と同様に黒くて直毛の睫毛。それが一本一本まで見えるような近さ。至近距離で見つめられて、ぴくりと肩が震える。

恋心を自覚したばかりの私の顔は、思いつきり火を噴いているはず！

あの、今気づいたんだけど。こんな間近で見られたら、化粧が崩れている悲惨な私の顔、毛穴まで全部見られちゃっているんじゃない？

途端に乙女心が発動した。今はそんなにじっくり人の顔を覗いちゃダメですよ、東条さん！

私の乙女心に気づいているのかいないのか——東条さんは、妙な羞恥心に襲われている私をじつと見つめながら、指でつつと頬の輪郭をなぞった。私は反射的に、ぎゅっと目を瞑る。

彼は、艶めく声で、「怪我はありませんか」と尋ねてきた。

「な、ななな、ないであります！」

動揺のあまり、不自然なほど声が裏返った。言った日本語も変だし！

ああもう、忘れた頃に体温が上昇して、再びあの不整脈が……！！

いい加減にしないと心臓が壊れてしまう。顔を背けたい気持ちでいっぱいだけど、でも東条さんから離れるのは嫌だと心が訴えてくる。

けれど離れなければずつとこのドキドキは続くわけで。それは精神的にもいろいろと負担が大きいわけで！

恋は何て厄介なんだ！

初めて自覚した恋心に、私は戸惑いを隠せない。

困惑と嬉しさ。相反する心が同居する。でも、その恥ずかしさやドキドキも嫌じゃないって気づいていた。

「何だ、麗。よかったじゃん。ようやく、東条さん」と会えて」

じつと私たちを観察していたらしいK君に、声を掛けられた。彼はいつの間にか、少し離れた場所で椅子に座っている。マイペースな猫のように寛いだ様子で、彼は目を細めながら、くすりと微笑んだ。

K君の隣では、響が視線を彷徨わせつつ、頬を染めている。どうやら目のやり場に困っているらしい。私は慌てて、東条さんに腕の拘束を解いてもらった。お姉ちゃんも気恥ずかしさでいっぱいだよ。

視線をK君に戻してうなずいてみせると、K君はおもむろに立ち上がって出口へ向かった。彼が見たかった舞台は終わったのだろう。

けれど、何か思いついたようにK君は立ち止まり、振り返った。

「今度会った時は、『てんとう虫のサンバ』を俺の魅惑ボイスで歌ってあげるよ」

口角を上げて不敵に笑ったK君。そして踵を返し、後ろ姿のままひらりと手を振って外に出ていく。

その曲がどんな曲なのかわからなくて、私は首を傾げながらも「ありがとう？」と彼の背中に向かって言った。

大人気ビジュアル系バンド、AdictのボーカルのK君が、特別にあの魅惑ボイスで私のために歌ってくれるなら、ありがたく頂戴しておこう。たとえそれがどんな曲であっても。

K君が去った後、警察の輪からようやく抜け出せたららしい聖君が突進してきた。

「君たち、無事だったかい!？」

響と一緒に聖君の抱擁を受ける。ギュツと抱きしめてくる聖君は、じんわり涙目だった。

「何て危ない真似をするんだ、二人とも！ 運がよかったから無事だったけど、こんな危険な真似は二度としちゃダメだからね!？」

いや、こんな危険な事件に遭遇することはそうそうないだろうし、もう二度と起こってほしくない。

人生で一度あれば十分というか、いやむしろ一度もない方がよかったよ。こんな事件に何度も巻きこまれるとか、ありえない。ドンだけ波乱万丈な人生なんだ。映画じゃないんだから。

「聖君こそ大丈夫？ どこか怪我してない？」

遠慮なくギューギュー抱きしめてくる聖君に潰されそうになりつつも、聞いてみる。

聖君は私たちをようやく熱い抱擁から解放してくれた後、ずれた眼鏡を直して「かすり傷程度だから大丈夫」とうなずいた。よく見たら頬にうっすらと傷が……

「つて、それナイフで切られたの!？」

血は止まっているけど、脅してナイフを突きつけられていただけではなかったのか。おのれ、許

すまじ……。聖君の整った顔に痕が残ったらどうしてくれるんだ。

沸々と怒りがわいてくる私と違って、聖君は何ともないような顔で微笑んだ。

「大した傷じゃないから、大丈夫だよ」

気にしないで、と頭を撫でられて、思わず涙がこぼれそうになる。この優しい温もりが失われなくてよかった。改めてそう思った。

次々と広間に乗り込んできた刑事さんたちは、手際よくテロ集団を拘束していった。

真っ先に捕らわれたのは、既に身動きが取れないほど頑丈に縛られていたボスだ。マスクを外した顔を改めて眺めてみる。四十歳くらいだろうか？　もしかしたら三十代かもしれない。

聖君とあまり歳が変わらない印象の男が浮かべる表情は、全てを諦めたものでも、怒りに満ちたものでもなかった。生気を感じさせない虚ろな瞳を見て、私の背筋にぞくりと震えが走った。感情の一切をそぎ落としたその表情が恐ろしい。

——あれが、うちの一族に恨みを抱き続けてきた、冷徹な男なのか。

近くにいた刑事さんに聞くと、男性トイレに捕まえていたテロリストの仲間たちは、すでに拘束したという。そして、人質に混じって逃走をはかった共犯者の男も、身柄を拘束したらしい。警視庁のエリート管理官で隼人君の同僚、桜田さんから得た情報をもとに、隼人君がその男を見つけたそうだった。

気がかりだったことが解消して、私はほっと安堵のため息をついた。

そうして、とりあえず私たちも今日は一度帰っていいと、刑事さんからお許しがでた。

聖君が響を誘って、二人が一緒に下に向かった。それを見ながら、私も東条さんと並んで非常階段を下りる。まだ、エレベーターは点検中だ。

「大丈夫ですか？」

いつもの優しく穏やかなその声だけで、私の心臓が大きく跳ねた。

もう、どこまで反応する気なの、この身体は！

「だ、大丈夫です！」

階段を下りきって非常階段の扉を開けると、東条さんは私の肩ではなく、腰に手を回した。さりげなく自然なその手つきは、労わりに満ちている。もっと自分に寄りかかかっていいということなのかもしれないけれど、突然こんなことをされるとひどく戸惑ってしまう。

え、ええっと！　ど、どうしよう。近い、近いんですけど!?

ってか何で肩じゃなくて腰!?　今まで肩は抱かれたことがあったけど、腰ってあったっけ!?

私を気遣ってくれているのだろうか。東条さんの真意がわからない。

もしかして寒そうだから暖めてくれるつもりとか？

それはそれで少し嬉しい気もするけど、ダメだ。心臓がもたない……!!

「あ、あの東条さん……!　歩きにくくないですか？」

遠慮がちに尋ねてみると、隣で歩く東条さんは見惚れるほどきれいな顔で、私に微笑みかけた。

「いえ、全く。むしろ、できるならあなたを抱きかかえて歩きたいくらいですよ」

——疲れているでしょう？

そう続いた言葉に、ぶんぶんと勢いよく首を左右に振る。そんな羞恥プレイ、勘弁してください！ 疲れていると言ったが最後、フェミニストの東条さんは、マジで行動に移すに違いない。言葉に気をつけなければ。

お姫様抱っこは乙女の夢だ。もちろん憧れるけど、好きな人に抱き上げられる時に重いなんて思われたら……：相だなダメージを受けてしまう。乙女の夢はダイエットに成功してから、是非、機会があった時に改めてお願いしたいかも……

ってちよつと待った！ まだ恋人同士でもないのに、私の一方通行の片想いなのに、何図々しいこと考えているんだ！

思わずちらりと隣を見上げると、私の視線に気づいた東条さんが麗しく微笑んだ。惚けそうになるのを堪えて、顔の筋肉を引き締めつつ前を見る。

ああ、ダメだ。かっこいい……!!

ふと見せられる笑みに、トキメキが止まらない。胸がきゅくと締め付けられてしまう。

東条さんがかっこいいのは前からだけど、何故か今まで以上に素敵に見える。これが恋する女の子が持つ乙女フィルターみたいな!? 好きな人は何割増しかでかっこよく見えちゃうっていう、恋のマジックなの!?

普段から美形で、スタイルよくて、非の打ちどころのない人が、もつと輝いて見えるなんて。恋

の力は本当に恐ろしい。心なしか東条さんの周りがキラキラ光っているみたい。って、それって何の特殊効果なの。眩しさで目が焼けたら困るんですが……

俯き加減で内心悶えながらエレベーターを待つ。私は無言のまま、胸の鼓動が東条さんに聞かれたらどうしようなんて考えていた。甘さを孕んだ空気を微かに感じながら……

### 〈告白への一歩〉

エレベーターで一階に降りると、ガラス一枚隔てた向こう側から、先ほどまではなかった騒がしい人の気配が漂ってきた。

外につながる正面ドアの向こうは、予想以上に人であふれている。報道陣や警察関係者、そしておそらくこのホテルの宿泊客や従業員などなど。

そろそろ夜中の十二時をまわろうかという時間なのに、そんなことは全然おかまひなしだ。

ちらりと外を窺って、あの中を突っ切って外に出るのは自殺行為に等しいと判断した。想像しただけでげんなりしてしまう。

だって私たちが出たとするよ？ そしたら、マスコミの人たちからすれば、出てきた二人のうちひとりとは人質——多分バレてはいないと思うけど、暴れまくった本人、もうひとりは東条グループの御曹司で美形の若手社長。話題性たっぷり。囲まれないわけがない。



私はまあ、顔が知られているわけではないから、適当にばぼつと逃げ切れると思う。けど、東条さんはそうはいかないだろう。だって彼は経済誌とかに時々写真を掲載されているから、マスコミには彼の顔を知っている人も多いはずだ。さらには東条さんのことを何も知らない人が見ても、彼は人目を惹くイケメンなのだ。こんな逸材、彼らがぼつとくわけがない。

隠しきれない存在感って、こんな時厄介いっせつかだなと感じてしまった。かっこいい人には誰だって目がいくものだ。それはわかる。非常によくわかる。でも。

正直言って、東条さんが女性に囲まれてキャーキャー言われているのを想像すると、面白くない……。テレビになんて映ったら、東条さんファンがますます増えちゃうじゃないの。そんなことを考えただけで、何だか胸の辺りがムカムカ、モヤモヤ？ してきた。

もちろん、私にそんな自分勝手なことを言う権利がないのは、重々承知している。だから、この気持ちには、とりあえず自分の中に封印。

「麗さん。裏から出ますよ。こちらです」

私がそんなことをいろいろ考えていると、不意に東条さんの大きな手にぐいっと引かれた。彼はそのまま、正面ドアと別方向に進み始める。

他の通路よりも少し狭い通路を通って辿り着いたのは、ホテル関係者専用の裏口だった。

こんなところ、よくご存知ですね、東条さん。

重い扉をゆっくりと開く。外からの冷たい風が、ぴゅうつと頬を撫でた。周囲に人がいないこと

にほつと胸を撫で下ろしていると、肩にふわりと東条さんのジャケットをかけられた。にほつと胸を撫で下ろしていると、肩にふわりと東条さんのジャケットをかけられた。

「そのままだと風邪をひきますので」

確かにドレスと薄手のボレロだけなので、外に出た瞬間に肌寒さを感じていた。

大きすぎてぶかぶかかな、そのジャケットは、暖かかった。そして東条さんの香りに包まれて、嬉しさがこみ上げてくる。

頬が赤く染まりそうになるのを感じつつ、お礼を告げた。

「あ、ありがとうございます」

「いえ、麗さんのその姿は少々目に毒なので。他の人に見せる必要はありませんしね」

東条さんは優しく微笑んだ後、私の肩を抱いてホテルの正面側に向かった。

風が冷たかったけど、今はその冷たさが心地いい。肩を抱かれて密着している状態で、私の顔が熱いから？

人気がない道を進み、私たちはホテルの正面玄関から少し離れた場所に辿り着いた。

まだホテルの中には、私の職場の上司で従兄いとこの鷹臣たかおみ君や、隼人君、そして東条さんの妹さんの朝姫あさひめさんが残っている。先に外へ出ているであろう響ひびきや聖君とも、合流したい。

目立たない場所にひっそりと佇たずみ、二人で、あふれかえる報道陣や警察官の動きをただじっと眺めていた。

こうやって東条さんと密着して肩を抱かれていると、触れている部分がかくかく熱いのがわかる。外気の寒さなんて気にならない。何だかドキドキして、身体が火照ほてってくる。

どうしよう。東条さんを好きだと自覚して、次に会ったら絶対に気持ちを伝えると決めただけ。

何も言わないまま会えなくなったら絶対に嫌。だから会えたら気持ちを伝えよう、と。でも、気持ちに余裕が出てきた今——。このタイミングで告白するのは性急すぎる気がしてきた。だって、もし告白して振られたら……立ち直れない。

そもそも告白って、一度もしたことないんだよ！ 初恋が今なんだから当たり前だけ。世の中の女の子は、こんなに緊張しながら好きな人に告白をするの？ それってすごい勇者じゃない?!

好きな人に気持ちを伝えるのは、もの凄く勇氣と度胸がいるってことを、私は初めて知った。気持ちを伝えてもそれが相手に通じるとは限らない。その恐怖と不安に押しつぶされそうになりながらも、自分を奮い立たせて気持ちを伝える。

たった一言。簡単な言葉のはずなのに、感情が伴うと難しくなる。相手を好きになればなるほど、言葉が出てこなくなる。

うう、どうしよう……。いつ言おう。

まるでドラムを叩いているような激しきで、心臓がばつくんばつくん響く。と、不意に、好きな人に自分がどう思われているのかが気になった。

そういえば私、東条さんにどう思われているんだろう？

嫌われてはいない、と思う。ここまで会いに来てくれたし、いろいろよくしてくれるし。優しく

気遣ってくれて、甘やかしてくれて、辛い時は慰めてくれる。

普通相手が嫌いだったら、そんなことはしないよね？ わざわざ忙しい自分の時間を割いてまで、嫌いな人間と一緒に居ようとは思わないよね？

東条さんはいつでも、私に優しい。

でも、彼が女性に優しいのはフェミニニストだからだ。私に向ける甘い視線や言葉も、特別な意味がないって言われれば、確かにそうかもしれない。

だって、別に「好き」って言われたわけじゃないし……

東条さんに「好きです」と告白する前に、「私のことどう思っていますか？」って訊くべきなのだろうか。

というか、そもそも告白って、どういうタイミングでやるものなんだ？

うう〜ん、と内心で唸<sup>うな</sup>っていたら。刑事さんの群れの中央にいた人物が、小走りで見付いてきた。その動きにつられるように、周囲の視線が一斉にこっちに集中する。

「見つけたぞ、麗！」

少し少年っぽさが残る声。そしてその声にふさわしい美少年顔。黒い髪が夜風になびく。

だが明るい街灯に照らし出される顔には、その快活な声に反して濃い疲労の色が浮かんでいる。それが何とも言えない儂<sup>はかな</sup>さと色気を醸<sup>か</sup>し出して、周りの視線が一気にその美少年に釘付けになった。

「あ、桜田さん！」

警視庁のアイドルにしてエリート管理官の、桜田笑。

容姿だけなら、間違はなく私より年下に見える。今年三十歳になったとは全然思えない。

手を大きく振って駆け寄って来た桜田さんは、いきなり私にがばりと抱き着いた。そしてすぐにぱつと手を離すと、両手で私の肩を掴み、心配顔と怒り顔を同時に披露した。うん、実に器用だ。

「無事か？ 怪我はないか!？」

「大丈夫だよ。ほら、かすり傷程度だし」

あんな無茶をしておきながら、かすり傷で済んだなんて、私って結構悪運が強いかも。でも匍匐前進なんてしちやつたから、きつと明日は筋肉痛やら何やらで動けないだろう。

私に大きな怪我がないと確認した桜田さんは、ほーつと大きく息をついた。

その様子を見て、彼にも多大な心配と迷惑をかけてしまったことを改めて認識した。

「心配かけてごめんさい。それから、いろいろありがとうございました」

「無事ならいいが……。いいか、麗。今回はかすり傷で済んだかもしれないが、あんな無謀なこと二度とするんじゃないぞ！ 明日みっちりと事情聴取させてもらうからな！」

うげえ。事情聴取……

なんて気が重くなる単語！

その場には桜田さんだけじゃなく、隼人君もいるだろう。そして当然のように、鷹臣君が同席するはず。警察関係者じゃないのに、何故か鷹臣君がそこにいることを、私は確信できた。

きつと鷹臣君の説教だけで、二時間はかかる。それを考えると、今から胃が痛くなってきた。

「とりあえず、発砲はしてないだろうな？ 証拠が残るやつを採み消すのは面倒だぞ」

苦々しい顔付きの桜田さんを見て、ふと思いつ出した。

「そういえば私、まだ持つてるよね？ あの奪った拳銃。」

「あ、そうそう。それなんだけど……」

べらり、とドレスのスリットを捲つたところで、東条さんと桜田さんがギョツとしたように目を睜つた。あれ？

途端に、顔を真っ赤にした桜田さんが叫び声をあげた。

「う、麗……！ 婦女子が男の前でスカートを手を捲るな!! お前には恥じらいつてもものがないのか!？」

一応周りに聞こえないようにポリウムを落としてはいるものの、いきなり雷を落とされて、無理やり裾から手を外される。

「え？ いやあの違うよ!? そうじゃなくて、これ！ この拳銃!!」

慌てて言いながら桜田さんの手を振り払い、私は太もものストッキングに差し込んでいた小型の銃を取り出した。そしてそれを、桜田さんに手渡す。

一瞬驚愕した桜田さんだったが、でもその後、すぐに真剣な顔になり、じつと銃を見つめていた。その鋭い眼差しは、いかにも刑事さんって感じた。

「わかった。これは俺が預かる。……他にはもうないな？」

「銃？ うん、それ一丁だけだよ」

ハンカチを出して銃を受け取ると、桜田さんは角度を変えつつあちこち眺めていた。そして黒光りするそれを押収品としてハンカチに包み、懐のポケットに仕舞った。

その時、報道陣に囲まれた鷹臣君と隼人君、朝姫さんが、堂々と歩いて来た。モデルのような外見の三人が並んで歩く様子は、それはそれは見ごたえがある。その中のひとり、警視庁の有名なアイドル刑事。当然のように記者たちに顔が知られている隼人君は、事情を聞きだそうとするマスコミを集める、かつこうの餌になっている。

だけど、そこはさすがの隼人君。取材は全て後で受けるとか何とか言って、やんわりと笑顔で受け流している。ここでは適当にかわして、おそらく事後の対応は誰かに押しつけるつもりなんだろう。

「麗ちゃん！」

その三人の中で真っ先に私に気づいた朝姫さんが、猛突進してきた。そしてその勢いそのまま、思いつき私に抱き着いてくる。

美女の抱擁は素直に受けとろう。いつでもウエルカムです。

「よかったわ無事で！ 心配したのよ？ 怪我はない？ 白夜にセクハラされていない？」

「ご心配おかけしてすみませ……つて、へ？ 東条さんに？ いえ、特に……」

さらりと最後に、めちやくちゃ答えにくい質問投げましたよね？

隣で東条さんが凄みのある笑みを浮かべている。朝姫さんは慣れているのか、涼しい顔でシカトしているが。

その後、鷹臣君と隼人君から説教と小言、そして最後に鉛と鞭のような労いの言葉をいただいた。縮めに、鷹臣君に頭を撫でられた。その後で、ようやく響が姿を現した。

「あれ？ 着替えたの？ 響」

「うん、さすがにあのままじゃね」

疲れきった顔で弱々しくため息をついた弟を、私はギュッと抱きしめた。お姉ちゃんのせいで無茶させてごめんね、という思いを込めて。

改めて、例の黒尽くめのかっこうから、もとの高校の制服姿に戻った響をしげしげと眺める。ジャケットは着ていない。テロ事件の最中に私が借りて、そして会場のテーブルの下に置いてきたんだよね。きつとまだそこにあるんだろう。けど、回収したところでもう着られないだろうな。ここはひとつ、私が新しい制服を一揃えプレゼントするとしよう。

「怪我はないようだね。よかった。響が動いてくれて助かったよ。ありがとー！」

「身体は大丈夫だけど、ハラハラしすぎて心臓がいくつあっても足りないから、無茶するのはこれつきりにしてね、麗ちゃん」

「やっぱり私なのか！」

本日数度目のお詫び、それから、みんなの前で改めて「二度と無茶はしない宣言」をした。

私の背中に回していた腕を解いた響は、何かに気づいたように、ん？ という顔をして私の身体をくるりと反転させた。

「麗ちゃん、首の後ろで結んでるリボン、解けかけてるよ」

「え？ ホント？」

響は本当にそういうことによく気がつく。急いで緩くなっていたリボンを結び直してくれている。あ、そういえば。さっきの色仕掛け作戦で、一度結び直したんだっけ……

「む、むぐ!?」

いきなり背後にいる響が、慌てたように私の口を手で覆ってきた。

振り返り、響に抗議の視線を向けると、「麗ちゃん、しー!」と耳元で黙るように告げられる。

一体何……

その問いは、目の前から漂ってくる妖気のような空気を感じた瞬間に、どこかへ飛んでいってしまった。

「色じ……? 今、何と仰いましたか、麗さん」

静かに、冷やかな怒気を放っている東条さんの顔はいつも通り微笑んでいて麗しい。だが、周りの温度が急激に下がる。その変化に戸惑いながら、私は自分の失態を悟った。

あれ、もしかしなくても、今の言葉、口に出てましたか!?

響にこわごわ視線を送ると、こくりとうなずかれる。

……しまった。またお説教される!

「お前、なんつー危険な真似を……!!」

再び顔を赤く染めながら、怒り出す桜田さん。

「お前の色気なんぞに引つかかる男がいたとは、すげーな。貴重な体験じゃねーか。もつと女磨い

て、いざって時に武器になるようにしておけ」

あんまりなアドバイスを鷹臣君がくれる。

三人の反応が違いすぎるので、何て返したらいいか、もはやわからなくなってきた。

と、とりあえずこの寒さをどうにかしないと……! 笑顔なのに何故か怒っている感じがする東条さんを、とにかく宥めなければ。これ以上無茶をしたと思われるので、心配されるのは心苦しい。

「あ、あの東条さん。違うんです」

はつきりと「色仕掛け」って言うておきながら、違うも何も無いと思うが。

誤魔化すつもりはないけど、何とか誤解だけは解いておきたい。そこまで危険な作戦じゃなかったということ。

何と言って説明すればいいかあれこれ悩んでいたら、桜田さんがお兄ちゃんモードになって、とくとくとお説教を始めた。

「いいか麗。男は皆、狼なんだぞ! そんな危険な真似したら、一瞬で食われるぞ」

真面目な顔で言ってるのに、説得力はない。それは、桜田さんの美少女……もとい美少年顔と、狼とが結びつかないからだろうか。

「ええ、美少年顔の笑ちゃんに言われてもな」

「誰がエミちゃんだ! それと俺のことは美青年って呼べ」

——それはちよつと、無理があるだろう。

その場の全員が口には出さずに顔に出していたツッコミに、本人が気づくことはまったくな

かった。

翌日の事情聴取の時間など、大まかな予定を取り決めた後、ようやく帰宅できる空気が流れ始めた。

「響、お前、今夜は俺のところに泊まっていけ」

鷹臣君が唐突にそんなことを言い出した。

「え、僕？ 何で？」

言われた響は、戸惑った表情を浮かべている。確かに、これは何とも珍しいことだ。

「ああ、ちょっと確認したいことがあるからな。まあ、明日は日曜だし、別に構わねーだろう？ 麗」

確認、って一体何？

気になったけど、まあ鷹臣君の中で何かが明らかになったら、教えてくれるだろう。聞くのはその時でいいか。

それにしても、いつも俺様で人遣いの荒い鷹臣様なのに、姉の私に許可を求めてくるところは律儀というか、何というか。私の保護者は鷹臣君だけど、響の保護者は私だからか？

いずれにせよ、特に断る理由はない。

「いいんじゃない？」

「んじゃ行くぞ。お前らも帰れよ」

強引でマイペースな従兄いとこに半ば引きずられるように、響が連れて行かれる。二人が車に乗り込んだところまで見届けた後、ふと疑問に思っていたことを誰ともなく尋ねた。

「そういえば、このホテルに泊まっている人たちって、どうなったの？」

さすがにこんな事件があったら、今日こは使えないだろう。でも宿泊客はいい迷惑だ。

「それなら大丈夫みたいよ。閉じ込められていた人の中に、ホテル経営者がいて、そこに無料で泊まらせてくれるとか」

朝姫さんが説明してくれた。

すごいな、それ。青い薔薇ばらのパーティーって、どんだけセレブが集まっていたんだ？

「それじゃ、朝姫さんも？ そちらに移動するんですか？」

朝姫さんは今晚、ここに泊まる予定だったはず。どうするのかな。荷物すら取りに行けないんだし。

そうね……、と考え込む朝姫さんの手を取ったのは、意外にも隼人君だった。

「僕が家まで送るよ。行くよ、朝姫」

「はあ!? ちょ、ちょっと！ 何で私があんたに送られなきゃいけないのよ！」

朝姫さんの声に構わず、手を握った隼人君は、そのままどんどん歩き始めた。

え？ 何、それ！ 確か二人は、お見合いで振った者同士だったんじゃない？

「頼んでない！」という朝姫さんの抗議はあつという間に遠ざかり、すぐに聞こえなくなった。思いがけない展開に呆気に取られながら、私は二人の姿を見送った。

いつの間にあの二人は仲よくなったの？

「ああ！ 古紫のやつ、ひとりだけ逃げやがったな……！」

まだまだ仕事が溜まっているらしい桜田さんが、苦々しいため息をつく。彼はその後すぐ、部下に呼ばれて現場に戻ってしまった。刑事さんは大変だ。

「それでは私たちも帰りましょうか」

「へ？」

当然のように東条さんに手を取られて、エスコートされる。

向かった先は、すっかり見慣れた東条さんの黒い高級車。

助手席に座らされ、車が発車する。車はうちとは反対方向に走っている。一体どこへ……？

聞かされた答えに、私は自分の耳を疑った。

「今夜はうちに泊まっていたきます」

「……へ？」

東条さんの家に？

え、何で!?

慌てる私を余所よそに、前を向いてハンドルを握っている東条さんは、爽さわやかに告げた。

「私はもう、我慢も遠慮もしませんので」

——覚悟してくださいね？

最後に届いたその言葉は、まるで幻聴のように響いてきて……。私の思考を、しばらく奪って

いった。

### 〈心の準備〉

——東条さんと二人きりの車の中。

「響君がいないのに、麗さんをひとりにさせるわけにはいきません。特に今夜はいろいろありましたから」

先ほど鷹臣君が響を自宅に泊めると言って引つ張って行ったので、確かに今夜は私ひとりだ。それを東条さんは気にしてくれたいらしい。いろいろあった日の夜を、誰もいない家で過ごさせるのは、気が引けたのかもしれない。ただ東条さんは私に優しいのか。どれだけ私を甘やかすのか。

「でも、それって迷惑じゃありません？ 突然お邪魔したりして……」

遠慮がちに尋ねると、東条さんはあっさりと否定した。

「むしろ私が気になって眠れません。麗さんは目を離してはダメな人だと、今日改めて実感させられました」

おおう、ここでも危なっかしい人扱いか！ さすがに耳が痛い。

「私はもう、あなたを手放すつもりはありませんから」

え？

先ほど我慢や遠慮という言葉聞いた時にも一瞬疑問符が浮かんだが、今回の「手放さない」発言に、改めてドキッとした。

私が落ち着かないのに対して、東条さんは穏やかな表情を浮かべるだけだった。

途中でコンビニに寄って必要なものを揃えたいと頼んだけど、「全て間に合ってます」と意味不明な返事をされた。

いきなりお泊まりだなんて言われても、クレンジングや化粧水、歯ブラシや新しい下着、はたまた替えなんて、パーティー仕様の今の私が持っているはずがない。

ホテルのクロークに預けてある上着やバッグは、後日受け取りに行くことになっている。今手元にあるパーティーバッグに入っているのは、必要最低限のものだけ。

だから「間に合ってる」と言われても……なのだが。

でもまあ、前にも一度泊まったことあるし、一泊だけなら平気……か？

男性の家に、しかも好きだと自覚した相手の家に泊まるなんて、緊張しないわけがない。しかし、既にお泊まり経験済みってところが、ある意味恐ろしい。自覚前にお泊まりって、私どんだけ大胆だったの！

けど、東条さんは厚意で私を泊めてくれると言っているのだし。それにきつと、以前お借りした客間を使わせてくれるのだろう。だから、大丈夫かな？

そうやって、凶々しく甘えてしまう自分がずるいな、なんて思う。でも、いろいろあった今夜、

少しでも長く好きな人の傍にいられるなら、そうしたい。自分自身、凶太いという自覚はあるけど、今は東条さんの優しさに甘えたいと思った。

すっかり見慣れた東条さんのマンションに到着する。

既に二度目——いや、記憶にない事故も含めると三度目か——の東条さんのご自宅は、やはりため息が出るほど豪華で広い。

ものが少ないのに、決して無機質ではない、ちゃんと生活感のある温かい空間。

収納スペースがたくさんあるからといって、この雰囲気は出ないと思う。どうやってこんなにするつもりで、でも殺風景じゃないお部屋が完成するんだろう。

促されるままに、お風呂をお借りする羽目になる。若干戸惑いつつも、やっぱりここでもお言葉に甘えることにした。汗と埃を洗い流した後、ジャグジー付きのバスタブに沈んでゆっくりと疲れを癒す。

好きな人の家でお風呂に入っているこの状況……。冷静に考えたら、かなりすごいことしていないか、自分。

「つて、深く考えちゃダメだよ！ 東条さんを直視できなくなるから!!」

自分の気持ちを変えて認識したら、東条さんと目を合わせられるか自信がない。

この顔の火照り。お風呂に浸かって血行がよくなったからってという理由で通じるかな……なんてことを考えながら、私は浴室を出た。



バスルームから出た私は、東条さんから事前に渡されていた着替え一式を纏う。新品の下着と、パイル地のような、パジャマというか室内着。

薄いピンクの水玉柄で、上はチュニック丈。胸元にはリボンのアクセントがついている。下のズボンは裾がきゅっと絞られていて、ここではアクセントにフリルが。

めちゃくちゃ私好みで可愛いけど……。何故、東条さんがこんなものを持っているんだろう。もしかして、朝姫さんの忘れ物、とか？

「うん、朝姫さんのを貸してくれたんだよね、多分」

サイズが自分にピッタリとかそういうことは、あんまり深く考えないようにしよう。

髪をタオルで拭いながら、ヘアドライヤーをセットして、この後のことを考える。

ど、どうしよう、これから……

勢いで来ちゃってお風呂までお借りして。つい数時間前までは、「告白する！」なんて意気込んでたけど。こうして非日常から現実に戻ったら、冷静になったせいとか、何も今告白しなくてもいいんじゃないか、なんてためらいが生まれてくる。

もし私が気持ちを伝えることで、東条さんとの、この関係が壊れちゃったら……

これがずるい考えだつてことはわかっている。だけど、今の状態はとっても居心地がよくて。それが崩れることを考えると、どうしても慎重になってしまう。

ダメだな、私。あんなに会いたくつて、会ったら気持ちを告げるつて決めていたはずなのに、いざとなると怖気づくなんて。K君に知られたらきつと呆れられる。あの時の潔さや度胸はどこに

いったんだ？ と鼻で笑われそうだ。

それに、さっきも思っただけど……東条さんの気持ちがわからない。私を一体どういうふうに見てくれているのか。

勢いよく髪を乾かしながら、考え込んでしまう。

やっぱり、妹のように見られているのかな……？

いくら考えても答えの出ないモヤモヤを抱えたまま、私はドライヤーのスイッチを切った。

東条さんの気持ちをしっかりと聞いてみたい。だけど、それはもう少し時期を見てからに……

居心地のいい距離感のまま、しばらく好きな人の傍にいさせて欲しい。

私はそんなことを願った。

お風呂から出ると、ソファに腰掛けている東条さんと目が合った。

彼も着替えを済ませたらしい。部屋着なのだろうか。ゆったりとした白いカットソーに黒いジーンズを纏っている。

カジュアルでラフな服装なのに、どうしようもないほど眩しく見えてしまう。

加速し続けるこの感情はなかなか重症だ。

東条さんはソファから立ち上がったって、何か飲まないかと尋ねてきた。

「じゃあ、お水を頂いてもいいですか？」

「ええ、もちろんです」

冷蔵庫の中から冷えたミネラルウォーターのボトルを取り出し、しかもちゃんと蓋を開けてから渡してくれた。

蓋にまで気が回るなんて、東条さんの紳士っぷりはここでも健在か。ゆつくりとお水を飲んで一息つく。ほっとしたところで、ふと気づいた。

ものすつこくいまさらだけど……私、今スピンなんですが！

あんまり顔を見られるのは困る！

そそくさと踵を返して距離を置こうとしたら、東条さんに手を取られた。飲んでいた水のボトルを取り上げられ、キッチンのカウンターに置かれる。そして、緩く抱きしめられた。

微かに鼻腔をくすぐるシャンプーの香りから、東条さんもシャワーを浴びたことがわかった。バスルーム、他にもあるんだ。まあ、そりゃそうか。だってこの広さだし。——つて、そうじゃなくって！

突然の抱擁に動揺するなと言う方が無茶。身じろぎ一つできずに、硬直してしまう。

パジャマ姿で密着している上、しかもお風呂上がりなのも相まって、体温がじわつと上がる。自分の顔がひどく熱いことがわかる。

私の動揺に気づいているのかいないのか。東条さんはそのままの体勢で、声を掛けてきた。

「麗さん。怖い思いをさせてすみません」

「え？」

何で東条さんが謝るの？

胸にうずめていた顔を反射的に上げると、苦い表情を浮かべる東条さんが、私の頭を抱きしめて再びその広い胸の中に囲い込んだ。

「傍にいられなかったことで、あなたに無茶をさせました。怖い思いもたくさんさせてしまいました。ひとりでテロリストに立ち向かうなんて真似、普通の人にはできません。しかも麗さんは女性で、こんなに小さくてか弱く、守られるべき立場であるはずなのに」

苦さを含んだ掠れ声が、私の鼓膜を震わせる。

その声色から、本当に彼を心配させてしまったのだと実感した。

胸がぎゅつと絞られたように、ひどく苦しい。たとえ最後の「小さくてか弱く、守られるべき立場であるはず」って言葉が自分に当てはまるかどうか、疑問に思っても。

「私は何もできませんでした。これほど自分の無力さを嘆いたことはありません」

——違う。

抱きしめられている頭を動かして、私は東条さんの顔を見上げた。

「違います。東条さんは私を助けてくれましたよ？ 電話で話せただけで勇気ももらえて、頑張ろうつていう力をくれたんです。そしてちゃんと迎えに来てくれたじゃないですか。何もできない人なんかじゃないです」

ちよつと、いや、かなりタイミングが悪い登場ではあったけど……

あの件について触れてこないなら、こちらもその話を振るのはよそう。訊かれても困るし。

「麗さんが芯の強い女性なのはわかっています。でも、ここには私しかいません。ですから、いつ

「までも気を張り詰めていなくてもいいんですよ？」  
頭をゆっくりと撫でる東条さんの手が、優しく、気持ちよくて、暖かくて。  
弱音を吐いてもいい。甘えてもいい。そう言われた気がして——  
ピンと張った糸が緩んだ。私の目の奥が熱くなる。  
ポロリと零れた涙が一筋、頬を伝った。



腕の中で俯うつむいて静かに泣き始めた麗を、白夜は沈痛な面持ちで抱きしめた。  
自分の肩に届くくらいの背丈の麗の身体は、抱きしめると女性特有の丸みを感じられる。と同時に、肩の細さに驚いた。

ぎゅっと力を込めたら折れてしまうんじゃないかと不安になるほど、男の自分とは身体づくりが違うのだ。

柔らかに華奢きゃしゃで、大の男に立ち向かう屈強さとは無縁の女性。

なのに、そんな麗のいざという時の度胸のよさを、今日は改めて見せ付けられた。

怖いとただ泣いて、守られる存在ではいてくれない。

震えて何もできない役立たずには育てていない、と鷹臣が言い放った言葉が脳裏に浮かんだ。

それでも、白夜にはわかる。度胸や根性や勇気があっても、麗はやはり、守られる側の女性な

のだ。

おそらく、彼女は恐怖を感じる暇がなかったのだろう。

ピンと張り詰めたテンションが切れたら動けなくなると、本能的に悟っていたのかもしれない。

あの場で交渉材料を持っていたのは、確かに麗だった。思いがけず、奴らの思惑を知り、情報を手に入れた。それを効果的に使うにはどうしたらいいかと、散々悩んだことだろう。

人質ひとじをひとりでも多く解放するために。誰も怪我けがをせず無事でいるために。

この小さな背中に、どれだけの人が救われたことか。この小さな背に庇かばわれて先に脱出した人々は、どんな思いで非常階段を下りて、自分たちに助けを求めたことか。

麗は、生き物が本能的に警戒する炎を使つて、敵に立ち向かったという。

解放された人質ひとじたちが興奮気味に語っていたのを、白夜は小耳に挟んだ。

本音を言えば、この目でその姿を見たかった。

彼女を危険にさらすわけにはいかないと考えている自分がいる。しかし、瞳に強烈な意思を秘めて前を向いている彼女の姿を、この目に焼き付けたかったと思っっている自分もいる。

赤いドレスの裾すそが焦こげるのも構わず、凜りんとした態度で炎を掲げている彼女の姿を想像する。

扉を開けた瞬間に視界に飛び込んできたのは、突進してきた男に踵かかと落としをくらわす麗いさの勇ましい姿。

その決定的瞬間に、その場にいた刑事を含めた全員の視線が、彼女に釘付けになった。

スリットから覗いた扇情的な足で床に転がる男を踏みつけていた彼女は、決してか弱いとは言え

なかった。

ボロボロのドレスを纏まとって髪を乱した彼女は、目を奪われるほどきれいで……

正直言つて、惚れ直した。

が、言葉を失ったままその場に立ち尽くしていた時に、妙なリクエストに答えた麗せりふの台詞せりふで我に返ったのだ。

普段の彼女からは絶対に出てこないはずの代物しろもの。結果、目も耳も、自分の何もかもが彼女に奪われた。

そして、自分に気づいた彼女が、狼狽ろうばいする姿がひどく愛しかった。抱きしめたい衝動のまま、彼女を引き寄せて腕の中に閉じ込めることができた時、ようやく心の底から安堵したのだ。

泣き言も弱音も吐かない彼女を、どうやって慰めたらいいのだろうか。

初めから、ひとりきりの自宅に帰らせるつもりなどなかった。

もしひとりで麗を帰したら。きっと彼女は気持ち落ち着いた頃に、ひとりきりで涙を流すはずだ。

嗚咽おとどをこらえて身体を震わせ、あの時味わった恐怖を思い出して……

彼女が静寂の中でひとり孤独に泣いているなど、耐えられない。

麗は、周りに人がいたら自分の弱さを見せない。しかし、あの時彼女を抱きしめた瞬間。彼女は自分を抱きしめ返した。それがほんの少しでも自分を求めているからであったのなら、弱さを見せてくれるのではないか。

彼女を存分に甘やかしたい。怖かったと泣いている彼女を慰めたい。

ひとりで恐怖を味わうようなことなど、二度とさせない。

もう大丈夫だと伝えて、彼女を安心させて、抱きしめる。

たっぷり泣いてしまえばいい。自分はそのために、彼女の傍にいるのだから……



私の目から一度あふれ始めた涙は、一向に止まる気配を見せなかった。水分が枯渇するんじゃないかと自分でも心配になるほど、次から次へと大粒の涙が零れ落ちていく。

何が何だかわからない。

ただ、本当は怖かった。でもそれをずっと我慢していた――

私は今、そのことに初めて気づいたので。そして、気が緩ゆるんでしまった。

会場ではとにかく必死で、泣いてなんかいられなかった。そんな暇があるんなら、全員が助かる方法を考えることが大切だったから。

あの時は、何か、変なアドレナリンが出ていたのかもしれない。とにかく何とかしようと思案をしまくってたし。

そして警察が来た後も、ずっと緊張感が続いていた。

けれど今は、お風呂に入ったからか、東条さんに抱きしめられているからか。それはよくわから

ないけれど、ようやく心が落ち着いて、現実世界に戻ってこられたと実感できたのだ。

優しく触れてくる東条さんの暖かい手や、抱きしめてくれる腕が嬉しくて、切なくて。

東条さんの言葉に、嗚咽を隠すこともせずに、子供のよう泣きじゃくった。

何も考えずに東条さんの胸に顔を押し当てる。

適度に鍛えられた硬い胸板から伝わってくる心音が、心地いい。

私は肩を震わせながら、ただ甘やかしてくれる手に身を任せた。

労わるような手つきで頭を撫でられ、髪を梳かれる。

時折「大丈夫です」「もう離れませんか」と落ちてくる声、さらに涙を誘った。

怖くて泣いているのか、その言葉が嬉しくて泣いているのか、もうわからない。

ああ、涙と鼻水でまた東条さんの洋服を汚しちゃったな、と頭の片隅でぼんやりと考える。こんなに泣いたら、きっと明日は瞼が腫れるだろう。

そんな顔を見られるのは嫌だな、なんて、どこか冷静な乙女心が呟いた。

でも、そういうことは今はもういいや。たっぷり泣いてすっきりして、寝る前にちゃんと瞼を冷

やせばいい。

東条さんはずっと私を抱きしめて、頭や背中を撫でてくれている。

本当ここまで優しくしてくれる東条さんは、どういうつもりなのだろう。

既に時刻は深夜の一時近い。こんな遅くまで私に付き合っ、ひとりの家に帰らせたくないからという理由だけで自分の家に泊めてくれるなんて。

その特別扱いとも呼べる優しさに、嬉しい気持ち半分、複雑な気持ちが半分。

東条さんは、私のことをどう思っているの？

ようやく涙がおさまってきた。今までのストレスや恐怖が全て洗い流されたような心地よい疲労感が、全身に染み渡っていく。

そして呼吸が整い始めた頃、今度は猛烈な恥ずかしさがわき上がってきた。

ああ、今のこんなぶさいくな顔で東条さんと目を合わせられない……！

「落ち着きましたか？」

東条さんの癒し声が、頭の上から落ちてきた。

小さく鼻を吸りながら、こくりとうなずく。今はきつと、喉がガラガラだ。

「でも、もうしばらくこうしていきましょう」

東条さんにそう言われ、そのままさらに抱きしめられて。嬉しさと恥ずかしさで胸がいつぱいになっってしまう。

顔を上げて東条さんの本心を探りたい。でも、泣きすぎたぶさいくな顔を見られたくない！

困惑と羞恥から、私は小さく身じろぎした。すると、緩く抱きしめていただけの拘束力が強まった。まるで私を逃がさないと言うように。

それでさらに混乱して、ぼんやりと考えていた疑問が私の口からぼろりと零れてしまった。

「あ、あの……！ 東条さんは、何でそんなに私によくしてくれるんですか？」